

中村 一美 展

NAKAMURA
Ikumi



絵画は何のために存するのか 絵画とは何なのか

《存在の鳥 107 (キジ)》 2006年 アクリリック/綿布 260.1×190.8cm 東京国立近代美術館蔵 A Bird in its Existence 107 (Phasianus colchicus), 2006, acrylic on cotton, 260.1×190.8 cm, The National Museum of Modern Art, Tokyo

2014年3月19日(水) — 5月19日(月) 国立新美術館 企画展示室1E [東京・六本木] Kokuritsu-Shin-Bijutsukan

休館日=毎週火曜日 ただし、4月29日(土)、5月6日(土)は開館、5月7日(日)は休館 主催=国立新美術館
開館時間=10:00-18:00 金曜日は20:00まで、4月19日(土)は22:00まで開館(入場は閉館の30分前まで)

新
THE
NATIONAL
ART CENTER
TOKYO
国立新美術館

中村一美展

NAKAMURA
Kazumi

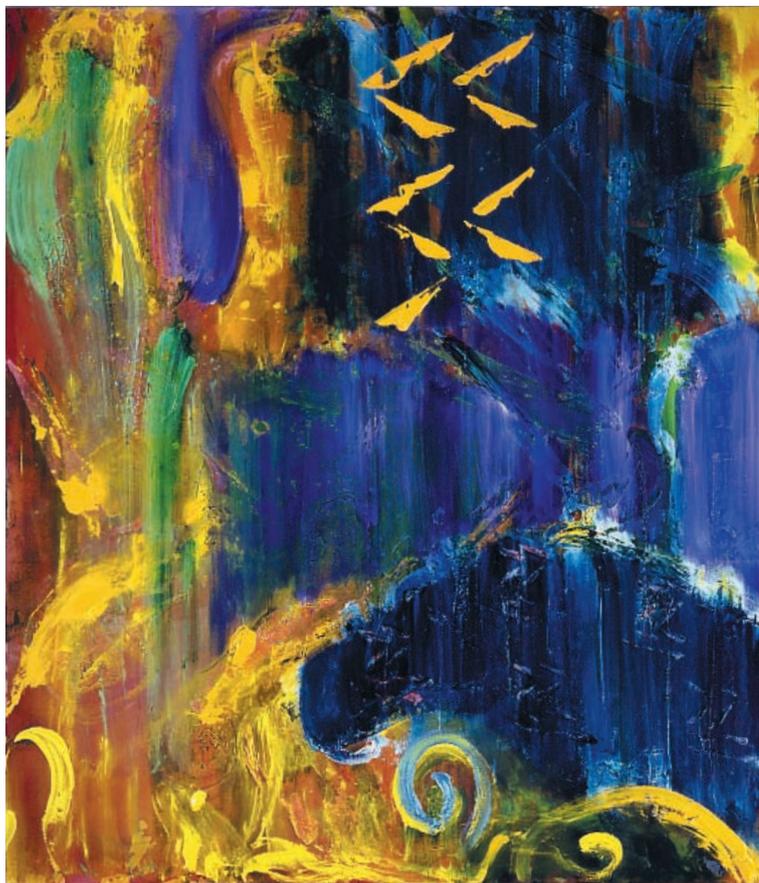
1980年代初頭に本格的な絵画制作を開始した中村一美(1956生)は、同世代の中でも、もっとも精力的な活動を展開してきた現代美術作家・画家の一人です。

——絵画は何のために存するのか。絵画とは何なのか。中村は、この疑問に答えるために、ジャクソン・ポロック、マーク・ロスコ、バーネット・ニューマンなど、西欧のモダニズム絵画の到達点とみなされていた戦後アメリカの抽象表現主義絵画の研究から出発し、彼らの芸術を乗り越える新たな絵画・絵画理論を探求します。中村が特に参照したのは、日本の古代・中世絵画、中国宋代の山水画、朝鮮の民画など、東アジアの伝統的な絵画における空間表現や、形象の記号的・象徴的作用でした。また中村は、絵画の意味は別の絵画との差異の中にしか存在しえないという認識に基づく「示差性の絵画」という概念を、すでに1980年代に提出しています。それゆえその絵画は、同じモチーフに拠りながらも、つねに複数の作品が差異を示しながら展開する連作として制作されてきました。「存在の鳥」連作に代表される近年の絵画では、象形文字を思わせるマトリクスに基づきながら、多様な色彩や筆触や描法を駆使することで、抽象とも具象とも分類できない、新しいタイプの絵画の創造に取り組んでいます。

展覧会では、学生時代の習作から最新作「聖」まで、およそ150点の作品によって中村一美の絵画実践の全貌を紹介するとともに、2010年に構想されながら実現を見ていない、斜行グリッドによるウォール・ペインティングを初めて公開いたします。日本の現代絵画・現代美術の、到達点の一つを確認する絶好の機会となることでしょう。

中村一美略歴

1956年千葉県生まれ。東京芸術大学大学院修士課程修了(油画専攻)。1980年代始めより発表を開始した中村一美は、最初、「Y型」と呼ばれるY字形のモチーフによる表現主義的な絵画作品によって注目された。続いて、「斜行グリッド」、「開かれたC型」、「連差一破房」、「破庵」、「採桑老」、「織桑鳥(フェニックス)」などのシリーズを相次いで制作、今日における絵画空間とその意味性についての探究を、精力的かつ持続的に展開しており、その制作点数も、絵画だけで1200点を超えている。国内では、現代日本を代表する画家として数多くの個展・グループ展に参加し、主要な美術館に作品が収蔵されている。美術館での個展としてはセゾン現代美術館(1999)といわき市立美術館(2002)のものがある。海外での紹介も、「ユーロパリア・ジャパン'89」(1989)や北欧を巡回した「ジャパン・アート・トゥデイ」(1990-91)に始まり、近年では特に韓国や中国など、東アジアでの発表が多い。また、自らの絵画制作についての理論的なものを中心に著述も多く、『透過する光 中村一美著作選集』(2007、玲風書房)にまとめられている。



6

《採桑老67(黄瀬菴の翁)》

2001年

アクリリック、水彩、小石／綿布

290×250cm

個人蔵

第 I 部

空間としての絵画

—Y型／斜行グリッド／開かれたC型

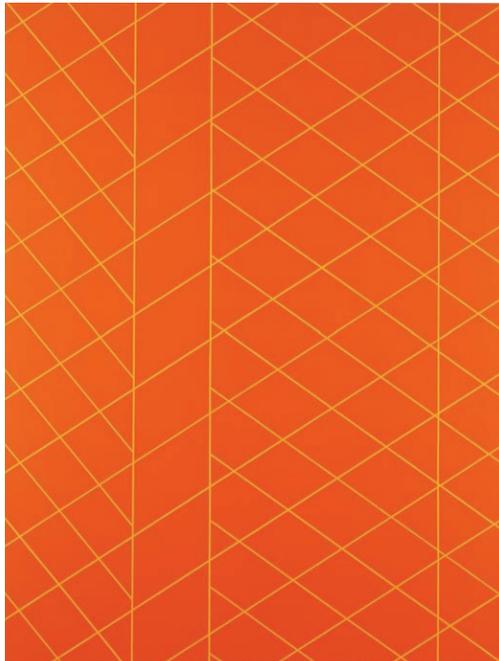
1980年代はじめから本格的な絵画制作をはじめた中村一美が、最初に注目されたのは、大胆な筆触によって縦型の画面いっぱいにY字形の形象を描いた絵画作品でした。この「Y型」のモチーフは、長方形の画面を規定するきわめて単純で抽象的な形であるとともに、樹木——とりわけ桑の木——の形象としての意味も込められていました。絹を生み出す蚕の餌である桑は、日本の文化や風土を暗示するとともに、母方の実家が養蚕農家であった中村自身のアイデンティティを支えるものでもあります。

続く「斜行グリッド」連作は、「Y型」を連続的に重ねることによって形成されています。『紫式部日記絵巻』における蔀戸の表現など、日本の古典的な絵画に見られる空間表現を参照し、一カ所に焦点を結ばない、水平方向に次々とずれていく、特異な空間性の実現されており、海外でも高い評価を得ました。

「開かれたC型」連作は、弧線を取り入れることによって空間的なヴォリュームを生みだし、この「斜行グリッド」の絵画空間に破調をもたらすことを試みたもので、1990年代以降のダイナミックな画面を準備しました。



1 《北興千丈》
1985年 油彩／カンヴァス 400×138 cm
作家蔵（いわき市立美術館寄託）



2
《オレンジ・プレート》
1986年
油彩／綿布
240×180 cm
国立国際美術館蔵



3
《リクライニング・ブッダ I》
1992-93年
油彩／綿布
190×400 cm
個人蔵
（東京都現代美術館寄託）

第II部

ソーシャル・セマンティクス

社会意味論としての絵画

——連差一破房／破庵／採桑老／死を悼みて

1990年代に入る頃から、中村は絵画の社会性について深く考えるようになります。冷戦終結後の流動化する国際情勢のなかで、絵画の意味やあり方を思索する中村がめざしたのは、資本主義市場経済システムとナショナリズムや宗教の対立が複雑に絡み合い、人間疎外が苛烈化していくこの世界を表象し、批判する絵画構造の実現でした。

「連差一破房」は、室町（南北朝）時代の寺社縁起絵『清園寺縁起』に見られる不統一な建築表現の共存を参照した連作です。これまでの中村の作品とは異なって、空間の整合性を意図的に破綻させた絵画には、不穏な力動感がみなぎっています。続く「破庵」は、斜行グリッドの空間性を三次元に展開することによって、この方向性をさらに進めた連作で、山頂にたたずむ破れた避難小屋、「全ての破れた構築性についての絵画」（中村一美）という性格を併せ持っています。

「採桑老」は、雅楽の舞楽曲の名ですが、これを舞うと死期が近づくとという不吉な伝承があるため、舞う者はほとんどいないと言われています。柔らかな舞人の姿を連想させる画面では、翁や聖などの東洋的な老賢者のイメージが、Y型に始まる直立した樹木の形象と結びつけられています。「死を悼みて」においては、この世界のすべての死者たちに捧げられた哀悼と鎮魂を、絵画として実現しようとしています。



7 《死を悼みて濡れた紫の水瀬に立つ者》
2001-02年 アクリリック／綿布 290.3×240.2 cm
財団法人セゾン現代美術館蔵



4
《連差一破房XI (斜傾精神)》
2002年
アクリリック／綿布
400×900 cm
豊田市美術館蔵



5
《破庵29 (奥聖)》
1997年
油彩、アクリリック／綿布
260.2×570 cm
いわき市立美術館蔵

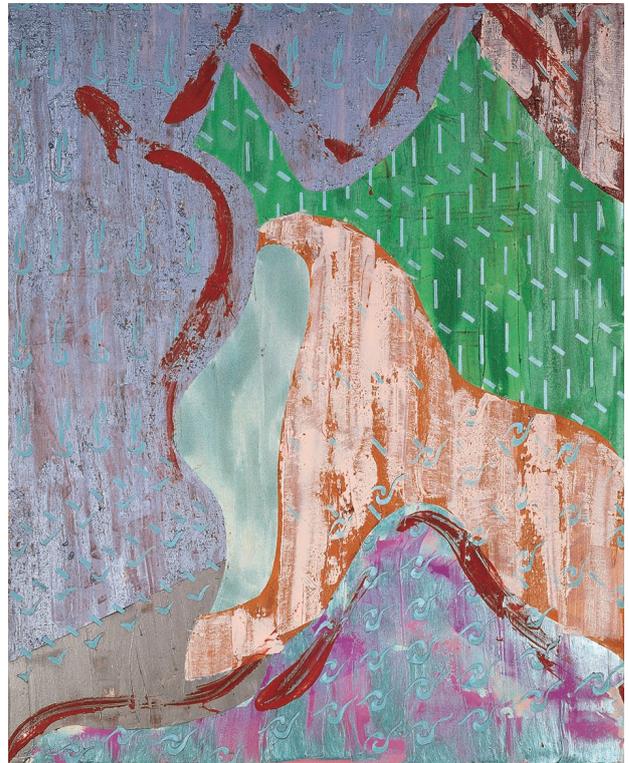
第 III 部

鳥としての絵画 ——織桑鳥／存在の鳥／聖

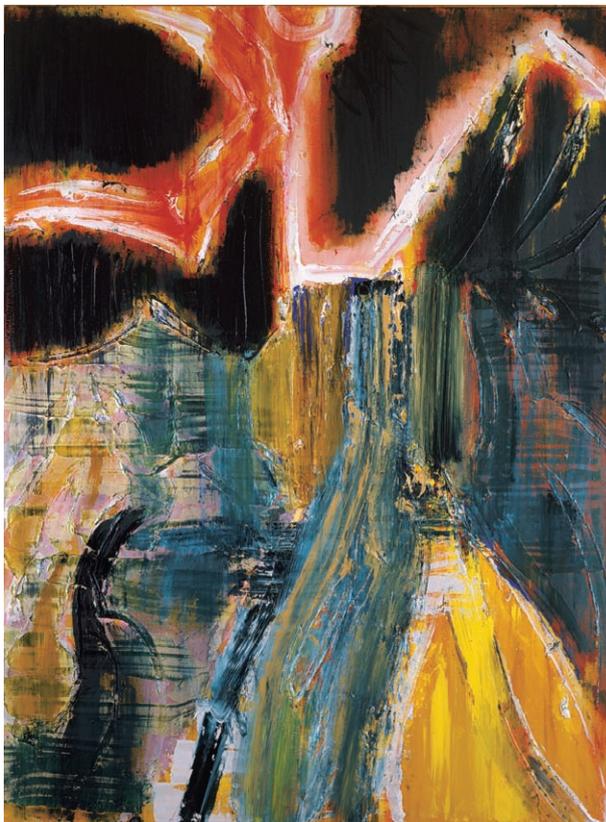
「織桑鳥」——桑を織る鳥と書いてフェニックスと読ませる、この語は、中村の造語です。「採桑老」や「死を悼みて」などの連作において、死に対峙する絵画についての考察を深めた中村は、死と再生を暗示するこの主題を取り上げます。そしてこのテーマは、2000年代半ば頃から、「存在の鳥」に移行します。

「《存在の鳥》とは、あらゆる存在の飛翔についての絵画である。存在は飛翔しなければならず、飛翔し得るもののみが存在である」(中村一美)。テロや戦争、災害が相次ぐ世界とその悲惨に対して、絵画を描くことの意味を模索していた中村が到達したのは、鳥としての絵画でした。「存在の鳥」は、300点を超え、これまでで最大の連作となっています。朝鮮の民画、始祖鳥の化石、鳥の象形文字などの鳥の原型的なイメージを参照したいくつかのパターンに基づき、その中で様々なタイプの絵画が実現されています。中村が語る存在＝鳥とは、まさに絵画そのものをも意味しているのではないのでしょうか。

2013年に初めて発表された「聖」は、もっとも新しい連作です。中村の作品のなかで、これまでも折に触れて取り上げられてきた仏教的な聖性のイメージが、「存在の鳥」を経て、形象的なマトリクスとして現れているのを見てとることができるでしょう。



8 《織桑鳥IV(フェニックスIV)》
2002年 アクリリック、土、メッキ箔／綿布 300.1×240.2 cm 作家蔵



9 《存在の鳥 107(キジ)》
2006年 アクリリック／綿布 260.1×190.8 cm 東京国立近代美術館蔵



10 《存在の鳥 239(ルリビタキ)》
2008-09年 アクリリック／綿布 292.2×218 cm 宇都宮美術館蔵

観覧料(税込)

当日：一般1,000円／大学生500円

前売：一般 800円／大学生300円

団体：一般 800円／大学生300円

*4月19日(土)は「六本木アートナイト2014」、5月18日(日)は「国際博物館の日」につき、入場無料

*高校生、18歳未満の方(学生証または年齢のわかるものが必要)および障害者手帳をご持参の方(付き添いの方1名を含む)は入場無料

*前売券および当日券は、チケットぴあ(Pコード：765-908)、ローソンチケット(Lコード：36767)でも取り扱っています(手数料がかかる場合がございます)

*前売券は2013年11月9日(土)から2014年3月18日(火)まで販売(国立新美術館では2013年12月11日(水)から3月17日(日)まで)

*団体券は国立新美術館でのみ販売(20名以上に適用)

*会期中に当館で開催中の他の企画展および公募展のチケット、またはサントリー美術館、森美術館(ATRo)で開催中の展覧会チケット(半券可)を提示された方は、団体料金が適用されます

*65歳以上の方(年齢のわかるものが必要)は、会期中に当館で開催中の公募展チケット(半券可)の提示で大学生団体料金が適用されます

報道関係のお問い合わせ

国立新美術館 広報担当：石松、菊池、桐生

Tel: 03-6812-9925 Fax: 03-3405-2532 E-mail: pr@nact.jp



THE
NATIONAL
ART CENTER,
TOKYO

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2

TEL: 03-5777-8600(ハローダイヤル)

国立新美術館 URL: <http://www.nact.jp/>

関連イベント

2014年4月26日(土)

中村一美 講演会

会場：国立新美術館3階講堂

※本イベント、並びに計画中のイベントの詳細については、追って発表いたします。なお、日時や内容は変更となる場合があります。最新情報は当館ホームページをご覧ください。

同時期開催の企画展

「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」

2014年2月19日(水) - 6月9日(日)



■アクセス

東京メトロ千代田線 乃木坂駅 青山霊園方面改札6出口(美術館直結)

東京メトロ日比谷線 六本木駅 4a出口から徒歩約5分

都営地下鉄大江戸線 六本木駅 7出口から徒歩約4分

中村一美展 広報画像掲載一覧

展覧会広報用として作品画像をご用意しております。ご希望の場合は別紙の申込書に必要事項をご記入の上、ファックスにてお申し込みください。
(メールで直接お申し込みいただくことも可能です。)

1

《北奥千丈》

1985年

油彩／カンヴァス

400×138 cm

作家蔵(いわき市立美術館寄託)



2

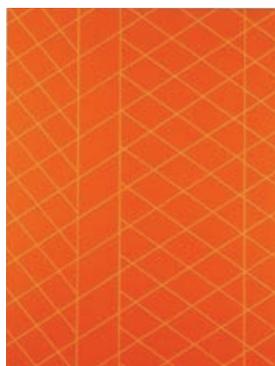
《オレンジ・プレート》

1986年

油彩／綿布

240×180 cm

国立国際美術館蔵



3

《リクライニング・ブツダ》

1992-93年

油彩／綿布

190×400 cm

個人蔵(東京都現代美術館寄託)



4

《連差一破房XI(斜傾精神)》

2002年

アクリリック／綿布

400×900 cm

豊田市美術館蔵



5

《破庵29(奥聖)》

1997年

油彩、アクリリック／綿布

260.2×570 cm

いわき市立美術館蔵



6

《採桑老67(黄瀬范の翁)》

2001年

アクリリック、水彩、小石／綿布

290×250cm

個人蔵



7

《死を悼みて濡れた紫の水瀬に立つ者》

2001-02年

アクリリック／綿布

290.3×240.2 cm

財団法人セゾン現代美術館蔵



8

《織桑鳥IV(フェニックスIV)》

2002年

アクリリック、土、メッキ箔／綿布

300.1×240.2 cm

作家蔵



9

《存在の鳥 107(キジ)》

2006年

アクリリック／綿布

260.1×190.8 cm

東京国立近代美術館蔵



10

《存在の鳥 239(ルリビタキ)》

2008-09年

アクリリック／綿布

292.2×218 cm

宇都宮美術館蔵



中村一美 NAKAMURA Kazumi 展

広報用画像データ・プレゼント用招待券申込書

国立新美術館 広報担当行 FAX: 03-3405-2532 E-mail: pr@nact.jp

◆画像データ申込み(ご希望のデータの番号にチェックをつけてください)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

貴社名:

媒体名:

掲載/放送予定日:

月 日発売/放送 (月号)

ご担当者名:

TEL:

FAX:

E-mail:

画像到着希望日:

月 日 時ころまでに送付

◆プレゼント用招待券申込み(ご希望の場合はチェックをつけてください)

10組 20枚を希望します。

*発送は 12月下旬を予定しております。チケット発送先となるご住所をご記入ください。

〒

◎写真ご使用に際してのお願い

*作品写真の使用目的は、本展のご紹介のみとさせていただきます。なお、本展覧会終了後の使用はできませんのでご了承ください。

*写真掲載にあたっては、[記載クレジット]を表記してください。(サイズ/素材はスペースにより省略可)

*トリミングおよび文字のせはできませんのでご了承ください。

*基本情報確認のためゲラ刷・原稿の段階で下記の広報担当までファックスまたは E-Mailにてお送りください。

*掲載紙・誌等を必ず広報担当までご送付いただきますようお願い致します。

*招待券プレゼントの受付・発送などは貴編集部にてお願い致します。

報道関係のお問い合わせ:国立新美術館広報担当 石松、菊池、桐生

Tel: 03-6812-9925 Fax: 03-3405-2532 E-mail: pr@nact.jp